

聖霊降臨後第4主日礼拝

「解放の福音の知らせ」

ルカ4：42-5：12

(1)

「朝になって、イエスは寂しい所に出て行かれた」(ルカ4：42)。「この一節は極めて印象深い箇所といえます。」

鎌倉のイエズス会の修道院に宿泊した時のことでは、夕食に出た「ロー・カッパ」の底に「PRAY AND LETS WORK」の文字が見えました。先ず祈る、それから働かへ、これが修道会の原則であるといわねばかたが、それでも、なるほどと納得しました。あたふたと起きて、起きてバタバタと一日を終えているように、いつしか日々の生活のリズムは狂い始めます。

チロバ牧師として知られる榎本保郎先生が、「アシラム」という運動を始めました。「ア」は「出る」、「シラム」はこの世」という意味です、即ち、世から退修して、祈る、即ち「リトリート」ともいえます。全ての日本のクリスチャンが、せめて一日の初めに、5分でも、神の御前に静まり、祈る習慣があるなら、日本の教会にリバイバルが起きると信じてきました。日々いかに多忙であるとしても、神の御前に静しし・祈りの時を持つということとは、たやすうと、いつも難しく感じます。

主イエスは、弟子たちが気づかぬ内に、寂

しい所に向き、祈っておられたのですから、今朝、このことを深く心に留めておきたいと思えます。

「ヨシヤ、主イエスが「ダネサレ湖」(カシラマ湖)の岸边に立つた、」群衆がイエスに押し迫るやうな神の「こゝはを聞いた」(5：1)と云うのを聞きます。

「こゝはを聞かぬと言えぬと云うか、いえ、を聞かぬと云う。群衆の多きが、奇蹟・この・を求め、主のもとに押し寄せたやうな分がいます。何と、「神のこゝを求め、」押し迫った・押し寄せてきた」のですから、あらえなく云うです。

その時です、岸边に引き上げられた小舟二艘のかたわらで、漁師たちが網を洗っていました。それが、主イエスの目にとまりました。(「網」は、「投網」と思われます)。

彼らは夜通し働いたのですが、その晩は雑魚一匹捕れませんでした。むだ働きであったと思いつつも、それでも網の手入れをしていました。漁をする者にとって「網」の手入れは大切です。

「道具を大切にしない選手は、大成しません」とは、野球のイチロー選手の言葉です。彼は、試合が終ると、バット・グローブ・スパイクを入念に手入れすることで、大リーグでも有名でした。

確かに、その晩は、彼らにすれば骨折り損のくたびれもうけでした。それでも、次の

漁に備えて網の手入れを怠りなくしていた
のです。

(2)

主イエスは、網を洗っている「シモン」(後
の「ペテロ」)に近づき、少しだけ岸から舟
を漕ぎ出すように頼みました。それから舟
の中に座りながら、岸辺に集まっている群
集に向かって御言をお語りになりました。

話し終わると、「シモンに対して、」深みに漕
ぎ出して、網を下ろして魚をとるなさい」と
申しました、いえ、命じたのです。

すると、「シモンは、」先生。世通し働きま
したが、何一つとれませんでした」と不満を
口にしましたが、「でも、おじい様をおのり、
網をおろしてみまじょう」と、いやいや、
不承不承応じました。「ところが、今朝の大切
なポイントです。

「先生。世通し働きましたが、何一つとれ
ませんでした」「、疲れとむなしさを覚えて
いたシモン・ペテロに向かって、主イエス
は、」深みに漕ぎ出しなさい。「そこで網を
下ろしてみなさい」と命じたのです。

対して、「シモン・ペテロは、」でも」と口に
しましたが、「せうまごおっしやるなら、お
じい様ごおり、網をおろしてみまじょう」
と、不本意ながら腰を挙げたのです。文語
訳は「それと」、「口語訳は、「しかし」です。

「でも、しかし、それと、お言葉ですか
ら……」と主イエスの言葉に答えたシモ
ン・ペテロではありませんが、心中は穏やか

ではなかったはずで
彼は幼い頃から、父と共に漁に出ています
た。ガリヤラ湖のベツサイタ村のペテラン
の漁師です。穴場がどこにあり、潮の流れ
や、北の「プロン山から吹いてくるガリヤ
ラ湖特有の風向きなどを、すべて熟知して
いました。その彼が夜通し働いても何一つ
捕れなかったのです。そのペテラン漁師の
シモンに向かって、漁にはまるで経験のな
い陸の人主イエスが、「深みに漕ぎ出しなさい
」「そこで網を下ろしてみなさい」と命
じたのです。いまさら何を言っかと思っ
たかも知れません。しかも、既に日は昇りは
じめていました。漁に不向きな時刻です。
しかし、その全てを承知しながら、シモン
は、「しかし」「それと」「でも」——を口に
しながら、お言葉ですからと、舟を沖へと
漕ぎ出したのです。

「論語読みの論語知らず」と言います。「医
者の不養生」ともあります。実はルカは医
者でした。専門分野には、意外な落とし穴
があるのです。ペテランの漁師といえども
例外ではありません。

「ムダ」が平気で出来なくてとは、例外人
になれと言ったのは、岡本太郎のお母さん、
「岡本かのこ」さんです。

旧約聖書「ハブロン」の言葉に、「あなたのパ
ンを水の上に投げよ。すつと後の日になっ
て、あなたはそれを見いださう」(11:1)
「パン」を水の上に投げよ——、じつとほ

ム々な行為はありません。自分のしていることが無駄ではないかと思われる時があるものです。それでも水の上にパンを投げた」といっているのであります。

それにしても、疲労と徒労感を覚えていたシモンが、「わたしたちは、夜通し苦勞しました。何もとれませんでした」といっため息を漏らした彼の心中は、わたしたちの胸にズシンと響いてきます。

わたしたちも、時に「フ」「フ」「フ」したおなしきに襲われます。自分なりに精一杯努力したにもかかわらず、おもわしい結果が出ない時、もはや、何をやる気にもならなくなり、その先どうなるかととらわれる瞬間があります。シモン・ペテロもその一つでした。

それでも、「しか」「しか」と主イエスの促しに応じたのですから、流石といわねばなりません。

(3)

「駄目」といふ言葉があります。「駄目でも」とも「が、シモン・ペテロのその時の思いであったのかも知れません。それでも、彼は気を取り直し、再び舟を沖に漕ぎだし網を降ろしました。

すなわち「さうさうさう、」たぐひの魚がはいり、網は破れそうになった」(6)ということではありませんか。それだけではありませぬ、」別の船にいた仲間の者たちに、助けを頼み、魚を両方の舟いっぱいに引き上げたのび、「舟とも沈みそうになった」(7)と

いっているのです。

シモン・ペテロは、仲間へ「やった・やった・・・」と小躍りして喜び、大漁旗をなびかせて、ヘッサイタの港に意気揚々と引き上げたといえる場面です。

ところが、シモンは、この時、意外なことを口にしました。「主よ。わたしのような者から離れてください。わたしは罪深い人間ですから」と申しながら、おそれかこみ、主イエスの足もとにひれ伏したのです。

まるで、重大な罪を犯した者のようです。「わたしは罪深い人間です」とは、主イエスに対する畏怖・畏敬・畏れの念から出た言葉であります。

太宰治の短編小説「富岳百景」があまりです。雲に覆われて、それまで一部しか見えなかった富士山が、突如、霧が吹きはらわれて、富士全体の姿を目の当たりにした時、同行していた女性が、思わず「嗚呼、恐ろしい、恐ろしい」とおそれの言葉をあげる場面があります。

預言者イザヤもまた、この「畏怖」・「畏敬」に捉われた一人です。イザヤは、神殿において神からの召命を受けた時、「栄光の主」・「聖なる主」をまじかに触れて驚き、「わびわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ」・「嗚呼、もうわたしは駄目だ、わたしは滅びるばかりだ」と叫んだのです。

真昼間の太陽の光の中で、自分の裸の姿をさらしたようにもいえます。

シモン・ペテロは、後にカイザリヤ・ピロポにおいて、主イエスから「わたしを誰というか」と尋ねられた時、「あなたこそ生ける神の子キリストです」と告白しております。時と場所とは違います。しかし、ペテロは、イエスというお方が、如何なるお方であるかに、気づき、おそれた瞬間です。それで、思わず後ずさりしながら、「わたしは罪深い人間ですから」と主イエスの足元にひれ伏したのです。

シモン・ペテロに対して、主イエスは「わがらなくともよ」(10節前半)と声をかけられました。そして、「今から後、あなたは人間をとるようになるのです」(10節後半)と意外なことを申されました。

口語訳は、「人間をとる漁師となります」です。「とんでもありません。わたしが、そんな人さまをすなどるなどという大それた器になれるはずがありません」としり込みなさるかもしれませんが、あるいは、「クリスチャンになったけど、今まで一度も人をキリストに導いたことがありません。とうしたら、人を導けるでしょうか」と戸惑いながらも、お役に立ちたいとの願いをいただいている方がおります。しかし、心配することはありません。

主イエスから、「わたしについて来なさい」と言われた時、シモン・ペテロは「何もかも捨てて、イエスに従った」(11)というのであります。条件といえば、それが唯一

ともいえる条件です。

教会には、「救霊」などという見慣れない言葉がありますが、「救霊」に求められている条件は、唯一つ、「われに従え」です。

トラウトや信仰書を差し上げました、個人伝道もしました、教会にもたびたび誘いました、ところが、何の反応もなへ、あのかたはダメではないか」と思われる時があります。

そうした時です、「でも、しかし、わたしのお言葉ですから・・・」と言いながら、それでも、自分の判断とか体験にこだわることなく、シモン・ペテロが主イエスさまの求めに応じたことへ従うなら、かならず、「人間をすなどる漁師」となるのではないのでしょうか。

大半の方は、立派な人格の持ち主にならねば、人を導けないと思っっているかもしれませんが、しかし、大変な思い違いなのです。使徒パウロは、自らを「あわれみの見本・サンプルに過ぎない」と申しました。

「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。「パウロがあわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の、「模範」となるためではありません。」見本」(サンプル)となるため、「まず私に対してこの上

ない寛容を示してくだりたからびます。」①
 テゼー：15116)と書つておぼ
 はありますか。

モン・ペテロは、後に初代教会の指導
 者となりましたが、全てはあの方の湖
 群における。」と、お言葉ですかりり
 とつて応答からはつきました。

スヴに、応答した彼は、網を捨て、父のも
 とを離れ、仲間の漁師たちを後にして、郷
 里ベッサイタを離れ、ヤコブヨハネと共
 に主イエスに従ったのであります。

私たちも同じではないでしょうか。「で
 も・・・、お言葉ですから」と応答すれば
 全てはつきました。

「御言に聴き従う」ことが、どれほど多く
 の信仰者に祝福とその結果とをもたらした
 か計りしれません。

「主は主の御声に聞き従うことほどに、全
 焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ば
 れるだろうか。見よ。聞き従うことは、い
 けにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊
 の脂肪にまさる。」①サムエル15:22)。

「キリスト教早分かり」があるとするばず
 すが、それは「でも」「と」「と」
 でも言いつながら、それでも「お言葉ですか
 ら」「人生の深みへと漕ぎ出すこと」です。

わたしが成長しないのは、聖書の学びが足
 らないからだと嘆いているかも知れませ
 ん。しかし、むしろ、主イエスが求めておられ
 るのは、
 「

粒」の信頼であります。」と「と」「と」
 かして「と言いつながら、御言に信頼して
 歩み出すこと」です。「わが神よ。わたしは
 みこころを行うことを喜びます。あなたの
 おきては、何時もわたしの心にあります」
 (詩編40:7-11)と喜ぶとて応答す
 る者でありたいと願います。

神の御言に従うことを見しとしない、か
 たくな、意志強固な、強情な、わたしが
 残念ながらあります。そのわたしのかた
 くなさが「ナ」に打ち碎かれるのは、た
 だ、わが罪のために十字架に架かり給うイ
 エス・キリストを、仰ぎ見るときではな
 いでしょうか。

「わたしから離れてください。わたしは
 罪深い人間です」と後ずさりせざるをえな
 いわたしたちに、主イエスの方からわた
 したちに近づいて、「恐れるな」「われに従え」
 と御声をかけて下さいました。

そうして、わたしたちは、御言に心から従
 う者と変えられました。主イエスに従うな
 ら、「人間をすなはぬ漁師」として下さいま
 す。「とも」「と」「と」
 げながら、それでも御言に応答する者であ
 りたいと願います。

【祈ります】

父なる神さま、御言をただ聞くだけでな
 く、御言に聞き従うものとならせてくだ
 り。キリストの御名に「祈ります」。
 「